

ゆうやけこやけ『忘れじの崖』

高嶋えつこ

ゆうやけこやけ『忘れじの崖』 2012年10月18日頃から2013年1月17日まで

みなさん、「TRPG」って、ご存じですか？ 会話だけで進むゲームで、通常は3～5人で行います。

GMという、ゲーム司会者がいて、その人がしゃべる言葉や情景を聞き、それに則った演技をするんです。

コンピュータのロープレみたいな感じかな。それぞれ、役割を演じながら、お話を楽しむのが、TRPGです。

外国ではRPG（役割演じるゲーム）っていいいます。いわゆる「ごっこ遊び」に近いかも知れませんが。

「運転手はきみだ、車掌は僕だ」みたいなノリですね。

ごっこ遊びと違うのは、TRPGには、厳然とルールがあるということ。

ゲームですから、ルールに沿ってプレイしないと、つまらないんです。

この記事は、2012年10月18日ごろから2013年1月17日まで、チャット場（どんとふ）で行った、セッション(ゲーム実演)の内容です。ルールブック(システム)は、「ゆうやけこやけ」というのを使いました。ほんとはおしゃべりでお話を作っていくんですが、話をする時間が合わないため、1日に一行から数行、チャット場に記事を残しあい、会話を進めていきました。

ですから、本来なら3時間～4時間程度で終わるはずのセッションが、三ヶ月もかかってしまうという事態になっています(汗)

「ゆうやけこやけ」は、昭和30年から40年ごろの、ひとつなという、架空の町を舞台にしています。登場するのは、へんげという、特殊能力を持ったふしぎな存在。動物の姿をしていますが、人間になることができ、人間の悩みや苦しみを、解決する手助けをしてくれるんです。

今回、ことりさんを演じてくださったのは、SNS「のべぷろ」仲間の「トウリン」さん。

生まれて初めてTRPGをするということですが、その演技力にびっくりします！では、さっそく話を始めましょう。

注：セッション内容は、会話で成り立っていることから、元記事にはできるだけ手を加えず、会話式で読めるようにしました。多少読みにくいとは思いますが、ご了承いただきますようお願いいたします。

プロローグ

ゆうやけこやけ『忘れじの崖』セッション開始

プロローグ：

GM（わたし）「ここはひとつなの町役場だよ。二人の男女が来てるね」

狐の鈴音（わたし）「役場の人間に突っかかっとる人間がおるの。おぬしとわらわで、ちょっくらあいつをからかってくるかえ？」
ことり（プレイヤー）「ええ～、でも、そんないじわるしちゃ、いけないよ？ それに、こわいし……」

GM(ゲーム司会者)「狐と小鳥が、そんな会話をしていると、男女のうち女性がふと、こっちを振りていて、ちょっと目を丸くするよ」

女性「あら……。あの子たち、尻尾が出てるわ……。もしかして、へんげ……？」

鈴音「うむ。わらわは鈴音という。そなたはなんというのじゃ？」

女性「わたしは飯田英恵っていうの。あそこで怒鳴ってるのは、わたしの恋人で、もとSPの仁井路夫って人……。あなたは鈴音さんね、よろしく。そこの小鳥さんの翼が出てるお方は、なんていうのかしら？」

鈴音「ことりというのじゃ。コイツは少し、シャイなところがあるが、いい奴だぞ？」
英恵「すてきな翼だわ。ことりさんって、まるで小さなキューピットみたい……！ そうだわキューピットさんなら、恋の悩みも聞いてくれるんでしょ。聞いて欲しいことがあるの……。仁井くんのことなんだけど……」
英恵さん、もじもじしています。

ことり「ことり？ ことりはね、こいは食べたことないなあ。だって、おおきいんだもん。めだかならあるよ。でも、めだかはちっちゃすぎて、たべてもたべても、おなかいっぱいにならないの。……おなか、すいたなあ」

羽をパタパタさせながら。

鈴音「なんでも【こい】というのは、人間の味がするっていうぞえ？ まずかろうなあ……」

飯田さん（顔を赤らめながら）、「ちがうわよっ！ えーとね、こいというのはね、えーと、女の子だったら、男の子を、好きだなーって思うことなの……。ヤダ、キューピットさん相手に、なに説明してるのかしらあたしって……」
だんだん、声が小さくなっています。

仁井くん（役場を出ようとしながら）「おい、英恵。なにやってるんだ？ 俺は先に、ドクター茶川のところへ行ってるぞ？」

GM：「仁井くんは、役場からさっさと出て行ってしまったよ」

飯田さん「……ア一行っちゃった……。そだ、キューピットのことりさん、おなかすいてるんだったら、ひとつな商店街にある喫茶店で、ホットケーキ食べさせてあげるッ。だから、悩みを聞いてッ」

必死の面持ちです。

ことり：きょとんと首をかしげて彼女を見る。

鈴音「これこれ、飯田さんよ。ホットケーキといわれても、この子にはわからんのだ」

飯田「（へちゃげて）うにゅー。じゃあ、なにか食べたいものある？ それを商店街のどこかで買ってあげてもかまわないわ」

鈴音「人間にしてはずいぶん気前がいいの一。どうしたんじゃね？」

飯田「仁井くんのようすがおかしいの、でもここでは詳しいことはちょっと……」

役場の人を、ちらちら気にしています。

ことり「あ、ことりね～ことりは、イナゴがすき～。まえにね、むらの、あっちのほうにすんでるおばあちゃんにもらったの～。『イナゴのつくだに』っていうんだって。おいしかったあ」

ことり、ほっぺを押さえて幸せそうに笑う。

鈴音（ほっこりして）「ええの一、イナゴのつくだに。あれはええ。わしも一個もらったことあるぞえ？ 実のはの、今日ももらったのじゃ。それを持っておる」

鈴音、なぜか服のポケットから、そのつくだにのに入った小さな瓶を取り出します。

英恵「……これはわたしへの、キューピット様からの試練なのねッ。英恵がんばるっ」

ことり：「あ、いいなあ。ことりもほしいなあ……」英恵さんの持っているイナゴを、おねだりする目でジッと見つめることり。イナゴをくれるなら、何でもしちやいそう。

鈴音「イナゴのおばさんは、だれかれかまわず瓶をわたしておったな。あれでよく、商売ができるものじゃ。ほれ、おぬしにやろう（英恵にやる）」

英恵「（鈴音から渡されたイナゴを、ことりにあげながら）、キューピッドさま、1週間前から仁井くん、なにか落ち込んでいて、とっても暗い表情なのです。昨日なんか、ぽつん、と『死にたい』って……。わたしのこと、嫌いになったんでしょうか。仁井くんの話を聞いて、その特殊能力で彼を助けてあげてください。もしかしたら、かれ……死んじゃうかもしれません……」

ことり、受け取ったイナゴを頬張りながら。

ことり「ことりはおねえさんのことすきだよ。イナゴくれたもん。でも、ことり、お空をとぶくらいしか、できないよ？ あ、あとね、ちょっとだけね、ピューッてできるの」

そう言いながら、首をかしげることり。

英恵「（イナゴをほおばることりをうっとり眺めながら）わたしもあなたが好きですわ。だっ

て空を飛べるんですもの……！ ああ、思い出しますわ……あのときも、そうやって、天使の大カラスさまが、わたしを助けてくださったんです……！」

思いっきり、うるうる目を輝かせている英恵さん。

鈴音（天使の大カラス？ もしかして、あのへんげの八咫鳥のことじゃろうか……？）

鈴音「（ことりに突っ込む）ピューツ、じゃと?! わしは、わしはの一、えーと、ザバーツじゃーっ……」

ことり「すずちゃん、ざばーっ、なの？ すごいねえ。何がざばー？ おみず？ あ、はっぱ？ はっぱかな？」ことり、目を輝かせてニコニコしながら鈴音に訊く。そして、首をかしげて。「おっきいからすさんって、だれのことかなあ。ことりの知ってる子？ からすさんは、みんなことりよりちっちゃいんだけどなあ。う〜ん……、でも、へんしんしたことりよりは、おっきいかなあ……。ことりはね、ことりになれるの。ちっちゃいことりなんだけどね。へんしんすると、いろんなところに行けるのよ？」そう言って、自慢げにパタパタと背中の中のをはばたかせる。

鈴音「ざばーっというのはの、わしの基本能力：『きつねの嫁入り』のことじゃ。その気になれば、雨がざばーっとふるぞ！」自慢げに、反っくり返ります。

英恵「ことりさんは、大カラスさんのことご存じないのですね。わたしが小さい頃、いじめられて泣いていたら、大きな黒い翼をはばたかせて現れて、いじめっ子たちに、『悪い子はお仕置きじゃぞ!』って杖をふりまわしてくれたんです。それ以来、いじめっ子たちの悪さはなくなったの。ことりのキューピット様が、もし、そのカラスさんに会うことがあったら、お礼を言っておいてくださいね」

英恵「ところで、小さなことりになれるんですか……！ いままで、どんなところに行ったことがありますか？ もしかして、わたしたちのなれそめのことも、ご存じかもしれませんね……！」

ことり、パッと目を輝かせて。「あ、おてんき雨だね！ ことりは、おてんき雨、だいすき！

だって、虹ができるんだもん。ことりになってね、虹をおいかけるの。でもね、いっしょうけんめいとんでも、おいつけないんだ……おねえさんのカラスさんなら、虹の下に行けるかなあ」

そう言うと、嬉しそうだったことり、急にちょっと悲しそうに目を伏せる。「でもね、ことりは、いろんなことをすぐにわすれちゃうの。おねえさんのこと、前に見たことことがあったのかなあ。ごめんね、わからないの」ことり、コトンと首をかしげる。

鈴音「すぐ忘れるのなら、わしが記憶してやろう。頼れる先輩へんげとしては、とうぜんであろうな」

英恵（ことりを抱きしめて）「虹を追いかけて、おいつけない……。その気持ち、すごくわかり

ます！ 恋というのも、虹みたいなものなのかもしれませんね」

鈴音「ところで英恵、カラスというのは名乗ったのかえ？」

英恵「ええ、八咫鳥だと言っていました」

鈴音「やはり……！（ことりに向き直り）、ことりよ、八咫鳥といえば、そなたの大先輩にあたるへんげだぞ。わしの唯一、苦手な年よりガラスじゃ。えーと、メスじゃったかの？ 年増女は口うるさいからの一(涙) 」

ことり、英恵の腕の中から首を巡らせて鈴音に笑いかける。ことり「わあ、すずちゃん、ありがとう。じゃあ、ずっといっしょにいないとだね。でも……コイって、虹みたいなんだあ。じゃあ、すっごくキレイなんだねえ」「やたさんは、また会ったら、わかるかなあ。どこに行ったら会えるのかなあ？」

鈴音「一緒にいるのなら、ゆめをもらわねばならんの一。今後はたっぷりもらおうかの！ ところで、八咫に会いたいのかえ、ことり？ それはちと、むずかしいの一。あいつはわが深鈴山におるが、いま、北海道のほうに行っておるようじゃ。ここへは越冬に来るだけのようじゃの。いまは5月の連休じゃによって、八咫とは会えんじゃろうな」

英恵「そうです、ことりさま。恋はきれいなものですよ。人のことを、すてきだなって思う気持ちですもの。ことりのキューピット様は、人を結びつける役目だから、きっと、恋をしたことがないのでしょね」

英恵さん、ひとり盛り上がってます。

英恵「そういえば、わたしと仁井くんとが出会ったとき、すてきな虹が架かっておりました。あれはもう、三年前になるのかしら。ここから一時間ほど行った、都会の御崎市で、大学に入ったばかりのわたしは、ハイキングサークルに入っておりましたね。そこのサークルで仁井くんと出会ったのです☆ 一緒に彼とみたハイキングコースの滝にかかる虹が、ステキでしたわ」

ことり「ふうん？」（だいがく？ さーくる？ はいきんぐ？）ことり、解からない言葉ばかりで、きょとんと首をかしげる。

英恵「（まだひとりで盛り上がってる）ひとつ年上の仁井くんが、『おれ、警官になるんだ』ってそのとき、夢を語ってくれました。あのころはよかった……」

鈴音「英恵よ……、ひとりでもりあがっとならんで、もっと分かりやすく説明せんかの。この子はまだ、8歳なのじゃぞ？ 知らないことのほうがおおいのじゃ」

英恵（恥ずかしさで真っ赤になって）「ご、ごめんなさい。つい、夢中になっちゃって」

鈴音「そりゃそうと、おまえさん、仁井くんとやらの跡を追わなくて良いのかえ？ 先に茶川の

ところへ行くと言ってから、30分もたつとるぞ？ あの茶川のことだから、仁井くんをおもちやにして、話を引き延ばしてるかもしれんが……」

鈴音「ことり、茶川というのはの、10年前に名古屋からやってきた、イカれた科学者じゃ。少々変人じゃによって、われらと似通ったところもあるようじゃの」

ことり「ことりとかすずちゃんとかと、同じなの？ じゃ、へんしんできるんだあ。『カガクシャ』って、何のへんげ？ 飛べるの？ 走れるの？」 鈴音「どうかの一。わしも、茶川がどんなへんげで、どんな姿に変身できるのかは、聞いてはおらぬのだ。だかの、『カガクシャ』というのはの、ふしぎの能力のない人間どもにも、ふしぎを使わせることができる、そなたのへんげの基本能力『つばさをあげる』と似たところがあるようなのじゃ。

わしらにはあまり縁がないが、空を飛べるふしぎな『飛行機』とかいう乗り物とか、ものすごく早く走れる『車』とかいう乗り物も、あいつらが考えついたらしい」

英恵さん「えーと（内心で『科学者ってそんなんだったっけー』と困惑しつつ）、科学者の説明ありがとうございます、鈴音さま。そう、話し込んでる場合じゃなかったんですわ。

(真剣な目でことりを見つめ)、

ことりさま、鈴音さま、一緒に、茶川さんに、会っていただけませんか？ 茶川さんってどんな人なのか、わたし、ちょっと興味があります。悪い人なら、あなたがたの「びっくり」能力で、びっくりさせることもできますもの。仁井くんが、彼になんの用なのかも知りたいし……。どうか、お願いいたします」(丁寧に、礼をします)。

鈴音「ことり、茶川は、ここから45分ほど西に行ったところにある『髪長山』に住んでおるようじゃの。イナゴももらったんじゃし、ここはひとつ、一肌脱いでやろうではないか。のう？」
ことり「すごおい！ 何でもできちゃうなんて、神さまみたいだねえ。すずちゃん、物知りだなあ。行く行く！ ことりも行く！ 神さまに会ってみたい」ことり、羽をパタパタさせて大興奮。今にも飛んでしまいそう。

『忘れじの崖』断章

断章～雑談モード～

鈴音「『髪長山』には、歩いて行くのかえ？ それともタクシーで行くのかえ？」
歩いて行くのなら、45分かかります。タクシーを使うのなら、10分で行けます。ことりが小鳥に変身して（コストは0）、先に飛んで行けば、5分ぐらいで着くかもデス。

ことり「髪長山は、ことりもよく行くよ。飛んでいったら、あっという間なの。でも、今日は、はなえさんと、すずちゃんと、歩いていきたいなあ」
英恵さん(ぱつと顔を輝かせ)、「わあっ、飛んで行くならあっという間なんてステキ☆ わたしもまだまだ、しゃべりたいこといっぱいありますわ！一緒に歩いて行きましょう！」

鈴音「いいのかの一。仁井くんは、かなり思い詰めた顔をしておった……。茶川になにか、そのかされとらんといいのじゃが……」
というわけで、みんなで一緒に、ひとつな町の商店街道を歩きます。夕方も遅くなってきているので、みんな、店の前には立たずに、中のほうで客を待っているもよう。

英恵「(回想に浸る) わたしは、ひとつな町から、6歳のときに御崎市に引っ越しました。あれから、もう17年ぐらい経つのでしょうか。御崎市に引っ越した先の、小さな頃のわたしは、町の子と一緒にあって、横断歩道をわたるとき、『黒いところは泥の沼！』ってゲームをしたんですの。ことりさんは、このゲームを、ごぞんじないですか？」

ことり、フルフルッと頭を振りながら、ことり「おうだんほどうって、どうろの白と黒のシマシマ？ ううん、知らない。いつもはね、ことりになってお空を飛んでるから、あんまりどうろは歩かないの」

英恵「そうなんですかー。道路を歩くのもいいですわよ～～～！ もう夕暮れだから、道路で遊ぶとあぶないけど……、明日までに事件が片付いたら、朝ご飯を奢って差し上げますから、朝いちばんに、一緒に遊んじゃいましょう～～。朝が早かったら、車も少ないですからね。

ルールはかんたんなの。白いところを『片足けんけん』で渡って行って、白いところだけ踏んで渡り切れたら、ゆめをもらえるのですわ。でも、ひとつでも黒いところを踏んじやったら、『黒いところは泥の沼！』って叫んで、その人がほかの参加者に、ゆめを渡さなきゃいけないの」

鈴音「おもしろそうじゃの、わしも参加したいの一」 鈴音「早く事件を解決したいわ……いろんな意味で……」 鈴音「遊びが好きなオナゴなのじゃな」

ちなみに、オンラインTRPGで『黒いところは泥の沼！』をするときは、オンラインサイコロを

使います。詳しいルールは、事件が片付いてからにしましょー。オンライン上でのサイコロを使うので、少しややこしいです。ミニゲームして、夢を稼ごうという魂胆（笑）英恵さん、ほんとに自分も夢が欲しいのねえ。

英恵「事件が片付いたら、御崎市にも一度、一緒に来ていただけないかしら。来てくださったらうれしいですわ。御崎市にはねえ、『デパート』や『水族館』ってところもあるのですよ。『水族館』は、わたしと仁井くんが、はじめて……（真っ赤になって）き、きすをしたところ……」

ことり：『すいぞくかん』は知ってるよ！ お魚さんが、たくさんいるとこだよね？ でも見たことないんだあ。行ってみたいな。……あれ？ はなえさん、顔が真っ赤。おねつ？ だいじょうぶ？

英恵さん：ええっ（さらに赤くなり）ええ、まあ……。鈴音：そんなに照れんでもよかろー……

英恵さん：御崎市の水族館には、クラゲさんとか、タツノオトシゴさんとか、熱帯魚さんとか、お魚がいっぱいいます。まるで竜宮城にいったみたいですよ。

英恵さん：ことりさんは、どんなお魚がお好きですか？ 見に行くとしたら、そんな魚を見たいですか？

ことり：ことりは、どじょうと、ふなと、めだかと、ざりがにと……ううん、それしか知らないの。でも、『すいぞくかん』っていうところには、赤いのか、青いのか、おっきいのか、いるんだよね？ ことりはこおんなおっきいの、見てみたいなあ。ことり：（ことり、両手をいっぱい広げて大ききアピール）

英恵：あら^^ 仁井くんも、どじょう釣りとかざりがに釣りとか、よくしてたって言っていましたわ。といっても、御崎市内でのことですけど。大きいのかと言うのは、イルカさんのことかしら。せびれとか、ついてますか？

ことり：ええっとね、前にね、『てれび』でみたんだけどね。すっごく大きくて、ヒラヒラしてて、しっぽが長くて、お空を飛ぶみたいに海の中を泳ぐの。英恵さん、知ってる？ ことり：（コトンと首をかしげて、英恵を見上げる）

英恵さん：ああっ知ってます知ってます。「とびうお」さんですね！ つっぴん つっぴん とびうお つっぴんぴん♪（歌い出す） なつかしー

ことり：『とびうお』っていうの？ それって、おっきい？ ことりがのれちゃうくらい？ ことりが見たのは、空飛ぶざぶとんみたいだったのよ？

英恵さん：そ、そらとぶざぶとん?! なんだろー?? 英恵さん：ことりさんは、乗ったことがあるんですか？

英恵さん：もしかして、マンタかしら？ それともエイ？（なやむ）

ことり：んー、ことりは、お名前は知らないの。こんななんだけどなあ……

ことり：（言いながら、ことりはしゃがみこむと、小石を拾って地面に絵を描き始める。ひしゃげたひし形、あるいは逆三角形に近い形に、頂点の一つから先にとげとげの付いた長い尻尾。その頂点の反対側に、飛び出た目が二つ）

英恵さん：（じっと見つめて悩む）うーん、なんだろう？ 英恵さん：この飛び出した目が、かわいいですね☆ それと、このとげとげの尻尾。水族館に行ったら、わかるかしら？ 鈴音：わしも水族館にいて、その正体をつきとめたくなくなったぞえ

GM：さて、そうやっているうちに、髪長山まであと15分となりました。

GM：わたしもわからないので(涙) この事件が片付いて、次回『悲運の少女を救え！』で、わかるといいなーと思います♪

GM：そろそろ夜になりかけております。もうちょっとお話ししたら、髪長山のふもとに到着です。

GM：ふもとから登って20分ぐらいのところに、例の茶川さんちがあります。

GM：なので、あと35分で茶川さんたちと会うことになります。

鈴音：あとちょっとだぞえ。忘れておるかもしれんが、わしらは茶川に会いに来た仁井くんのことを、助けに来たのじゃ。気持ちを切り替えていこうではないかえ？

ことり：（ことり、きょとんとして）ことり：『さがわ』って、だれだっけ？ ことりの知ってる人？

鈴音：これこれ。神さまみたいな人じゃとわしがいうたら、会いたいというたのはそなたであるぞえ？ しょうのないやつじゃのー

鈴音：この英恵さんはの、仁井くんという恋人が自殺をすと思い詰めておるので、そなたの能力を使って、たすけてくれと言ってきたのじゃ。鈴音：そして仁井くんは、茶川という、人間界で言うところの魔法使いのような男に会いに、髪長山にむかったのじゃった

鈴音：そなたはイナゴをもらっておるであろう。茶川に何をそそのかさされているのかは知らんが、仁井くんを助けてやらねば、約束をたがえることになるぞえ？

ことり：（ことり、一瞬視線を空に向けて考えて、パッと笑顔になる）ことり：あ、そうだったあ。ありがとお、すずちゃん。うん、そうだね、『まほうつかい』かあ、早く会いたいなあ。

仁井くんの悩み

GM：というわけで、ついに髪長山にやってきました

GM：山はけっこう険しく、道も石ころが転がっている状態（この背景みたい）。

GM：うんうんうなりながら、山に登ります。

ことり：はあ……あるくって、ふう……たいへん、だ、ね。飛んだら、あっという間なのに、な……
ことり：（ことり、息も絶え絶えです）

GM：一行がヒーヒー言いながら登っていくと、山の道の向こうに、小さな小屋のようなモノが見えてきます。

GM：その小屋から、なにやら2人の男の、話し声が聞こえてきます。??：おみゃーさんの言いたいことはよ～わかるなも 仁井くん：ほんとかなあ??：だで、わしのところへ来たんだなや？

鈴音：どうやら、茶川と仁井くんの話し声が聞こえるぞえ

鈴音：ふー、疲れたが、どうにか間に合ったようじゃ

鈴音：さて、ことりよ。そなたに頼み事があるのじゃが

鈴音：聞いてもらえるかの？

GM：時刻はもうじき6時です。ことりの返答を待って、場面を切ります。

GM：いよいよ本編のはじまりです！

ことり：なにになに？ なんでもするよ？

鈴音：ここからじゃと、小屋の中の2人の会話が、聞き取りにくい。鈴音：じゃによって、おぬし、小鳥に変身して、盗み聞きをしてもらえまいか？

鈴音：わしが行ってもいいのじゃが、小鳥のほうが目立たぬじゃろうからの

GM：ことりが小鳥に変身するのは、コストはかかりません。

鈴音：小屋は300メートル向こうにあるようじゃ

鈴音：たのむぞ、ことり！

英恵さん：鈴音さん、危険なことは、ないんでしょうか。もし、茶川さんというひとが、悪人だったら……

鈴音：茶川は悪人ではないから大丈夫じゃ。それに、もし、危険だったとしても、いざとなれば飛び立って、こっちにもどってこれるからの

英恵さん：心配だわ……

ことり：まかせて、まかせて！ 行ってくるよ！

ことり：（ことりはふわんと飛び上がると、英恵さんの手のひらに載るほどの小鳥に姿を変える

。一度クルリと鈴音と英恵さんの上を一回転すると、パタパタと飛んで行った)

英恵さん：すごいですねえ……ほんとに変身できるんですね……（感心しきっている）鈴音：しっかり見張らんと。あやつ、目的を忘れてしまうかもしれんてGM：一方、茶川の小屋。

仁井くんの声：そのどこがわるいんだ？ あんたにとっちゃ、渡りに船だろうが！ 茶川の声：うむ。科学の発展のため、というのはわかった。

茶川の声：しかしおみゃーさんが、科学に関心があるとは、おもえにゃーでよ？ 仁井くんの声：関心はないが、人の役に立ちたいという気持ちはうそじゃない。茶川の声：まあ、そんなにカリカリするんじゃにゃーがや。そろそろ晩ご飯の支度をしてやるでな、食いながら話をしてもよかる

ことり：（ことり、窓のすぐ近くまで張り出した木の枝にとまって、できるだけ窓に近付く。覗き込むと……）

GM：いろいろなヘンテコな道具が、部屋の中を転がっているのが見えます。

GM：羽の生えた靴、光の点滅する犬用の紐、ごちゃごちゃと歯車のついた歯ブラシ…… 茶川の声：久々の客であるからして、ここは鮭のムニエルでも食わせてやろうかなも。

GM：しばらく見ていると、台所からいいにおいが…… 仁井くん（独り言）：もてなしてくれるのか。人間嫌いだと聞いていたが、それほど悪い人じゃないのかも。

GM：鮭はうまそうにできあがりつつあります。それを料理しているのは、どうやらロボットみたいで。

GM：窓は、空気を入れるためか、少し開いています。さて、どうしますか？

ことり：あ、あそこ開いてるなあ……入ってもだいじょうぶかな。どうしよっかなあ……。こ

ことり：（しばし考えることり）ことり：んー、何か、よく聞こえないなあ……ええい、入っちゃえ！

GM：ことりがぱたぱたと中に入っていくと、料理を持って来た茶川がそれに気づきます。ちなみに茶川は医者に着るような白い服、度のきついメガネ、ぼさぼさの髪をしています。

茶川：うん？ なんだなんだ？ なんかちっこいもんが入って来たなも？

GM：一方、鈴音たちは、ハラハラしながら様子を見えています。

鈴音：あーっ。窓から入っていきおる。英恵さん：ことりさんがあぶないっ！（駆け出す）

GM：小鳥の身を心配した英恵さんが、小屋めがけて走っていきます。一方、茶川。

茶川：あのことり……ただもんじゃにゃーみたーやな。……つかまえてみっか……？

仁井くん：待ちなよ。あんた、あんなかわいい鳥をつかまえて、どうするつもりだ？

茶川：知れたこと。食ってやるのさ 仁井くん：だめだよ！ あんなちいさいの、食べても満足で

きないだろ。それより、眺めていたほうがずっといいよ。

茶川：弱いものにすぐ同情するやつだなや。だから、失敗するんだて 仁井くん：ほっといてくれっ！

GM：茶川は、なにやら訳の分からない機械のついた、虫取り網のでかいようなやつを、がらくたの中から取り出します。茶川：フェッフフェッフエ。久々に肉が食える……

GM：英恵さんが来るまであと1分ぐらいかかりますが、どうしますか？

ことり：（あっ！ 見つかった！）

ことり：（ことり、慌てて天井近くまで舞い上がり、パタパタと変な物の間を逃げ回る）

ことり：（紙一重でかわしながら）ことり：「うええ、やだぁ！」

ことり：（半泣きです）

茶川：ん？ いまなんか、声がしなかったかなも？

仁井くん：やめろよ茶川！ かわいそうじゃないか！

GM：ことりと茶川が追いかけてっこをしていると、バタンッと扉が開いて……

英恵さん：ことりさんっ！（追いかけてっこを発見して）あ、あなたっ、なにやってるんですかっ！

英恵さん：（バシーン！ 茶川の頬を平手打ち）

英恵さん：この方を、どなたと思ってるんですか！！ 乱暴したら、許さないんだからっ！

英恵さん：（激怒）

鈴音：茶川、ひさしいのお

鈴音：なにをしとるんじゃい

茶川：（頬をおさえて）うぐぐぐ……。なぐられたー（涙）

鈴音：当然じゃ！ ことりもわしも、へんげじゃぞ？ そんなもん食ってどうするんじゃい

英恵さん：（ことりがまだ天井にいるのを見ながら）、無礼を謝ってください！

GM：茶川は、ばつが悪そうになります。

茶川：（ぎくしゃくと）す、すまなかつたなも。そうや、へんげやったら人間に変身できるっていうがや？ 見せてくれんかなも

GM：茶川は、こころからすまなさそうにそう言うと、手に持った網（みたいなもの）を投げ捨てます。もし、謝罪を受け入れるのなら、ここで場面を切り、仁井くん・茶川それぞれアピールすることになりますが、夜になったので、コストも必要です。詳細はキャラシーに載ってますので、参考にしてください。

ことり：（ことりはしばらく天井付近をクルクルと回っていたけれど、やがて、英恵の後ろへと舞い降りてくる。そうして人の姿へと変わったことりは、英恵の後ろに隠れたまま、コソリと茶川を覗く）

ことり：神さまって、へんげを食べちゃうの？ ことりも食べる？

ことり：（英恵の服の裾を握りしめ、訊く）

英恵さん：ことりさま、もしこいつ（とって茶川をにらみつけ）があなたを食べるのなら、わたしが殴ってやります！ だいじょうぶですよ。

仁井くん：（子どもに変身したのを見て、びっくりして息を飲んでいる）茶川：いやー、すまんかった。久々に、肉が食えるとよろこんだんだがなや……

GM：では皆さん、場面を切ります。

GM：ご面倒ではありますが、またコストを変更したり、アピール内容を更新して、メールいただければ幸いです。

GM：ちなみに仁井くんのアピール内容は、「保護」 GM：茶川は、（みんなに）「対抗」するつもりみたいです(汗)

※

GM：お待たせしました、『忘れじの崖』後半セッションを始めます。GM：まずはお互いにアピールしたところで、仁井くんがことりを見ながら、少し涙ぐんでいるようです。

英恵：びっくりしたからって、泣くことないでしょうに……

鈴音：茶川よ、ことりはそなたを神さまだと思っておるようじゃ。無体なことはせぬようにな。

茶川：わしが神さま！ フォッフエッフエッフエ！ そりゃええなも！

鈴音：見れば、なにやらわけのわからん装置がいっぱいあるようじゃが……

茶川：おう。その羽の生えた靴は、天使の靴。光の点滅する犬用の紐は、夜でも犬の散歩が出来るんだでな！ 歯ブラシは……失敗作だなも！ フェッフエッフエッフエ！

英恵さん：いま捨てた網で、ことりさんをつかまえようとしてたでしょっ！ 食べられるってことりさま、おびえていらっしゃるわ！

茶川：だから悪かったっていうとるがや。な、嬢ちゃん（とって、茶川はことりにかがみ込み）、ドロップでも食うか？ 甘くてうまいぞ～～～

鈴音：わしにもドロップくれー！

GM：茶川は、フルーツの絵が描いてあるカンの中から、二、三個ドロップを取り出します。茶川：発明を褒めてくれたら、ダイスを2個転がしただけドロップをやるでよ。GM：さて、どうしますか？

ことり：（ことり、ドロップを見ながら、もじもじ）

ことり：（パッと、顔を輝かせて言う）ことり：ええ？ ええっと、ええっとね、天使の靴、かわいいなあ。それをはいたら、みんな、お空を飛べるようになるの？ 英恵さんも？ ことり、英恵さんと一緒にお空を飛びたいなあ。

茶川：おお、おお、よくぞ気づいたな！ これはな、地上数メートルまでなら空中を浮かぶことの出来る靴だなや。この娘（英恵というのか？）も、空を飛ぶことは出来るが、ま、数メートルまでだし、高所恐怖症なら飛ばない方がいいかもしれんて。

GM：そういうと、茶川はダイスを2個転がします。茶川：2d6 diceBot：(2D6) → 7[1,6] → 7

茶川：ほれ、7つドロップをやるでよ。レモン味、オレンジ味、メロン味、いろいろあるからどんどん食べるがええでよ 仁井くん：ドロップ食べられて良かったね、ことりさん……というのか。なんでここまで来たんだい？

ことり：わあ、すごい、キレイキレイ！

ことり：（ことり、色々な色のドロップを光に透かしては大喜び）

ことり：（かなり嬉しいので、Dr.茶川にゆめ2個進呈）

ことり：ええっと、ことりたちがここに来たのはねえ。ここに来たのは……ええっとお、……、……あれ？ 何だっけ？ ことり：（ことり、キョトンと鈴音を見る）

鈴音：しょうがないの一。えーと、実はの、仁井くん。おまえさんが、なにか、思い詰めているので、そこな英恵さんが心配して、ここまできたのじゃ。

英恵さん：そうよ。仁井くん、なにがあったの？ わたし……心配で。

仁井くん：……（じっとことりを見つめる）そっくりだ……。ああ、あの子にそっくりだよ！

（涙をぼろぼろ流す）茶川：こんな調子だでなあ。さっきから、あのときああすればよかったーってそればっかなんだて。

茶川：おれなら時間をさかのぼれる実験を出来るんじゃにゃーかってな。

茶川：そりゃ、できんことはにゃーが……

茶川：命がけになるでなあ、勧めんのだがや。

仁井くん：おれは、命を捨てる覚悟はできてる。SPを志したのも、そのためだ 仁井くん：もう、やめたけどな……

仁井くん：ことりくん……って言ったね。君が現れたのも、なにかの前触れなのかもしれない。

仁井くん：この命を、科学に捧げなさいっていう、天からの命令なのかも…… 英恵さん：仁井

くん！ なにがあったの！ 英恵さん：そんなに思い詰めるなんて！

仁井くん：ことりくんと一緒に、過去へさかのぼって……、あの子を助けに行けたら…… 鈴音：なにがどうなっとるんじゃ？ 自分の世界に、ひきこもってしもうとるようじゃが……

ことり：ことり？ ことりが何か、したらいいの？ 何したら、いい？ おに一さんが元気ないと、英恵さんが笑ってくれないの。ことりは、英恵さんが笑ってくれてる方が、いいんだけどなあ。

ことり：（ことり、首をかしげて仁井くんを覗き込む）

茶川：わしが時間の研究をしているのは事実だけどよー、いったい、なにがあったんだ？

GM：ことりの思いやり深いことばに、仁井くんはふと、遠い目になります。

仁井くん：一緒に行ってくれるのか……。ゆめを2コあげよう。

英恵さん：話して！ そうしたら、わたしたちで、解決できるかも知れない。

仁井くん：むりだよ……。まあ、それほどいうなら話をしよう。

仁井くん：実は先週――、SPの仕事が早く終わって、午後から郵便局に出向いたんだ。お金を引き出すためにね。仁井くん：そしたら、そこへ強盗が入ってきて……

仁井くん：おれは、そいつを倒そうとしてもみあいになった。そしたら、銃が暴発したんだ。

仁井くん：ところがその弾が……。郵便局にいた、小さな子どもに当たってしまっ。

仁井くん：年の頃はことりぐらい……

仁井くん：おれは、殺してはいけない人間を殺してしまった……

仁井くん：後悔していたときに、茶川の話聞いた

仁井くん：時間を研究していたため、名古屋の大学を追放されたとか……

仁井くん：おれは、時間旅行の人体実験をすることで、あのコを助け、過去をやり直せると思ったんだ。

ことり：（ことり、目を丸くする）ことり：『むかし』を変えるの？ すごいねえ、そんなのできるなんて、おじいさんはやっぱり神さまなんだあ。

ことり：ことりは何かできるかなあ……。うーん……。うん、でも、きっと、だいじょうぶ。ことりはおバカさんだけど、『うんがいい』んだって。ね、すずちゃん。ことり：（ことりはそう言って、鈴音ににっこり笑いかける）

鈴音：うむ。運はとてつもなくいいようじゃの。茶川よ、この子を連れていけるかえ？ わしも出来れば行きたいが

英恵さん：わたしだって行きたいわ！

仁井くん：みんな……TT

仁井くん：（うれしくなって、みんなにゆめを一個ずつ、プレゼントする）

茶川：フェッフフェッフフェ。神さまか、尊敬されるのはええの一。ほれ、ことりに1枚やろう。

茶川：じゃがな。過去への旅は、危険じゃぞ？ 実験動物は、全部死んでしもうたからな……。

茶川：おみゃーさん、命を賭けても、過去に戻りたいっていうのかなも？ 過去への旅は、とってもつらくて、かなしいことが待っとるんだで？

茶川：それにの、一緒に行けるのは一人だけなのだて。残念じゃが、3人も4人も連れてはいけにゃーの。危険すぎるでな

仁井くん：命を賭けてもいい。過去をやり直せるのなら。それに、たとえ死んでも、研究成果にはなるだろう。人の役に立てる死にかたじゃないか！

鈴音：ことりよ、これは仁井くんを止めるべきだと思うが、どうじゃろうか？ いくらおぬしが運が良くても、実験動物が全部死んでいるのでは、こころもとない気がするが……？

ことり：死んじゃうのは、やだなあ。でも、みんながショボン、てしてるのも、ことりはやなの。どうしよ、すずちゃん。ことりにできること、ない？

ことり：（そう言って鈴音を見ることりの小さな羽も、ショボン、としてます）

鈴音：ことりはほんとうに、やさしいコじゃの一。わしもみんながショボン、としとるのはいやじゃ。どうじゃろう、ことりや、仁井くんが殺してしまった子どもになったつもりで、仁井くんを説得してみては？ 危険な人体実験も、あきらめるかもしれんて。

ことり：ことりが、その子になるの？ できるかなあ……うん、やってみる。

ことり：（ことり、タタッと仁井に駆け寄った）

ことり：ねえねえ、お兄さん。『わたし』、テッポウでうたれた時、とってもとっても痛かったの。でもね、今は痛くないのよ？ だいじょうぶなの。

ことり：（ことり、コトン、と首をかしげると）

ことり：あのね、死んじゃったのは悲しいけど、お兄さんが悲しいと、英恵さんも悲しいの。英恵さんが悲しいと、ことりもすずちゃんも悲しいの。英恵さんとことりとすずちゃんが悲しいと、英恵さんとことりとすずちゃんのことを好きな人が悲しいの。

ことり：そうやって、みんなが悲しくなって、それがグルって回って、その子の好きな人も、悲しくなっちゃうと思うの。

ことり：（ことり、ちょっと考えて）

ことり：それにね、その子を助けようとしてお兄さんが死んじゃったら、やっぱりおんなじなのよ？ お兄さんは死んじゃうから何にもわからなくなっちゃうけど、英恵さんは悲しいのがずっと続くの。そしたら、ことりも悲しいの。でね、英恵さんもお兄さんを助けようとしておんなじことするでしょ？ そしたら、英恵さん死んじゃって、ことりはもっともっと、悲しくなるの。ことり、そんなのイヤだなあ……

ことり：（ことり、そこでハッと気づいたように口を押えて）

ことり：あ！ ことり、ことりのこと、『ことり』って言っちゃってる！ ちがうの、『わたし』なの。『わたし』はことりじゃないのよ。

仁井くん：（当惑したようにことりを見つめている）……でも、きみを殺してしまった責任は、取らなきゃダメだろ？ SPというのは、人を守る仕事だ。殺すなんてサイテーなやつじゃないか。

仁井くん：（茶川に振り返り、）そうだろ？ ドクター茶川。あんたは過去をやり直すのは危険だって言うけど、その危険はおかす価値があると俺は思う。時間実験場は、どこなんだ？

茶川：（困ったように）この先の、髪長山の東にある、『忘れじの崖』と呼ばれる崖に、時間跳躍機をセットしてはいるけんどな……

鈴音：ことり、なんだか仁井くんは、責任ということにこだわりがあるみたいじゃな？ こまったのお……

ことり：こまったねえ。ことりは、あんまりむずかしいことは、わからないの。あんまり考えたら、頭がパンクしちゃうよ。ことり：（腕を組んで考え込むことり）ことり：ことりはまだ死んでないけど、お兄さんといっしょに行ったら死んじゃうのかな？ ううん……それはやだけど、でも、お兄さんはどうしても行きたいの？

仁井くん：……たしかに、きみと一緒にいったら死ぬかもしれないね。キミを死なすわけにはいかない。俺だけ『忘れじの崖』に行く！

仁井くん：（がたっ！ テーブルの椅子を蹴立てて立ち上がり、扉に向かう仁井くん）英恵さん：待って！ 行かないで!!! 鈴音：待つのはじゃっ！ 行ってはならぬっ！

茶川：これ、『忘れじの崖』に行けば、確実に死ぬで……やめやー！

GM：仁井くんはまだ、扉に向かっている最中です。

GM：うまくやれば、仁井くんは、心を変えるかも知れません。 GM：ことりには、負担が大きいです、がんばってください！

ことり：あっ、行っちゃった！ うわあ、はやあい……走って追っかけても、追い付けないよ。『へんしん』するね。お兄さん、ことりといっしょだったら、『むかし』に行かないんだよね？
ことり：（そう言うと、ことりは小鳥に変身。仁井君を追いかけて、その頭にしがみつきました）

ことり：待って、待って！ お兄さん！ ことり：（ことりは仁井君の頭に乗ったまま、人の姿に戻ります（小さい羽根つき）） ことり：一人で行ったら、ダメなのよ？

仁井くん：え……？ きみはいったい……？

鈴音：そうじゃ。ことりよ、でかした！

仁井くん：（立ち止まる）きみが……俺が殺したキミが、止めてくれるのか？

鈴音：仁井くんよ、おぬしが責任を取る方法は、ほかにもあるじゃろ……？

鈴音：（ことりよ、よくやったぞえ！ 例の少女になりきって、仁井くんをもう一度、説得するのじゃ！）

ことり：お兄さんが死んじゃうのは、やっぱりやなの。それにね、おじいさんの魔法を使ったら、お兄さん、死んじゃうんでしょ？ じゃ、やっぱり、『わたし』のこと、助けられないのよ？
だって、死んじゃうんだもん、どうやって助けるの？ ことり：お兄さん死んじゃったままで、『わたし』も死んじゃったままで、そんなの、ちっっつとも、うれしくないの。お兄さんは、それでうれしいの？ 助けようって、思っただけで、何にもできなくて、いいの？ それって、『わたし』を助けたってことになるの？ ことり：（ことり、ふと気づいたような顔になって）

ことり：あれ？ それじゃ、今度は、『わたし』がお兄さんを殺しちゃうことになるんだあ……

ことり：（ことり、仁井君の頭の上でぼろぼろ涙をこぼします）

ことり：ことり、そんなのやだあ。お兄さんの事、殺したくないよう

ことり：（ことり、またすっかり地に返って大泣きです）

仁井くん：あ……（はっとして）そうなのか！ おれはまた、キミを殺すことになるのか！

仁井くん：（愕然としてぼうーっと立ち尽くす）

鈴音：仁井くんや……。死ぬのはいつでもできる。聞けばそなたは人を守る仕事をしているという。助けられる人がいるのなら、それを実行するのは、おぬしのつとめではないかえ？ 英恵さん：そうよ！ せっかく天から降りて来て、あなたを助けに来たこの天使さまのために、もっ

と活躍するのは、あなたの義務のほうです！

仁井くん：（まだ愕然としている）

仁井くん：天使……。そうなのか？ 俺の過ちを、許すために、天から降りて来てくださったのか？ ことりくん……。俺はもう一度、やりなおせるのだろうか……？

ことり：ことりもいつも失敗ばかりだけど、失敗したときはごめんなさいして、もっとがんばるの。がんばっても、やっぱり上手にできないこともあるんだけど、そしたら、もっともってがんばるの。そしたらね、みんな、「がんばれえ」って、言ってくれるのよ？

ことり：（ことり、もそもそと下りてくる）ことり：あのね、がんばっても、できないことはやっぱりできないの。でもね、できないからって、もうやめたってポイしちゃったら、それでおしまいなの。お兄さんが「死んじゃってもいい」って思うのは、「もうやめた」って言うのと同じだと思うのよ？ だって、死んじゃったら、もう何にもできなくなっちゃうんだもの。

仁井くん：（じっと耳を傾けて）ぐ……。そうだな……。「もうやめた」か……。それは考えてなかった……。

仁井くん：たしかに、キミの言うとおりの。死ぬのは逃げるのと一緒だな……

鈴音：生きるのじゃ。生きて、おかした過ちを、人を救うことでつぐなうがよいぞ。仁井くん：ことりくんのおかげで目が覚めたよ。おれは、「もうやめた」なんていやだからな！

仁井くん：死ぬより大事なことを、教わった気がする……

仁井くん：ありがとう、ことりくん！

ことり：お兄さんががんばったのに「ゆるしてあげない」って言われちゃったり、くるしくて「もうダメだ」って思ったりしたら、ことりがギュッとしてあげる。ことりがギュッとするとね、元気が出るのよ？

ことり：（ことり、にっこり仁井君に笑いかけます）英恵さん：よかった……。わたしも、ことりさんを、ギュッとするわっ！（抱きしめる）

茶川：仁井さんよ。命がけでわしの実験に参加したいっつー、心意気はよいと思うがな。周りを心配させちゃあかんがや。茶川：そうじゃ、わしの別の実験に、参加してみる気はないかなも？
命はかからんが、少々手間がかかるんで、ちょーっとばかり、こまっとったんで。

仁井くん：あなたの実験に参加すると言った以上は、約束は守らないといけませんが……。ことりくんたちに、危害は及ばないだろうな？ 茶川：だーじょーぶだ。「天使の靴」のバージョンアップをしたいんだて。

茶川：ことりくんに言ったように、わしの靴は、自由に空を飛ぶところまで行っておらん。まあ、代わりに、高いところから墜ちても無事でいるとか、3メートルほど浮けるとか、いろいろあるがの。

茶川：仁井くんには、この天使の靴を実際に使ってもらって、データを取ってもらいたいんだがや。

茶川：それで、少しはおぬしの、「世間に役だちたい」って言う望みも、かなうがね。

茶川：あ、それとことりくん。きみのおかげで、余計な犠牲を出さずにすんだでな、またドロップを7つやろうまい。

GM：そういうと、茶川は、ドロップをまた7コことりにあげました。

仁井くん：ことりくん、きみがギュッとしてくれると言ってくれたから、もう死ぬなんて言わないよ。

仁井くん：おれが迷ったり、苦しんだりしたときに、ひとつなまで来たら、またぎゅっとしてくれよな！

仁井くん：（にこ）

ことり：わあ、おじいさん、ありがとう。ことり：（両手でドロップを受け取ると、ことり、満面の笑みになる）

ことり：（そして、仁井に向き直ると）

ことり：いつでもしてあげるよ。ひとつな町に来たら、絶対、ことりを呼んでね？

仁井くん：わかった！ きみも、いつか、「御崎市」に来てくれ。いろいろ案内したいところがあるんだ！

鈴音：これでめでたし、じゃの一。おお、そろそろ夜が明けるぞえ！ われら、変身するには、少々、厳しくなってきたようじゃ。

鈴音：ことりよ、ここは一度別れたほうがいいじゃろう。

鈴音：名残惜しいが、ここはさらばじゃ。

英恵さん：ドロップ、食べるのを忘れないでね！

仁井くん：ことりくん、さいごに、おれをギュッとしてくれ、勇気をもって御崎市に戻るために……

ことり：いいよ？ じゃあ、しゃがんで？

ことり：（ことり、ちょいちょいと手招きして、屈んだ仁井君をハグ）ことり：お兄さんががん

ばれますように。ことりの元気を、ちょっとだけあげます。

仁井くん：（じーんとする）うん、なんだか力が湧いてきたよ。よし、御崎市に戻って、また新規まき直しだ！

GM：こうしてへんげたちと人間たちは、別れていきました。鈴音：さらば、さらばじゃ！（
といてきつねに変身し、立ち去る）

GM：こうして別れた四人ですが、その「天使の靴」を巡る、つぎなる冒険が待っていることに、
四人とも気がついていませんでした。

というわけで、ゆうこや第1回セッション『忘れじの崖』、終了です。

3ヶ月かかりましたが、長らくありがとうございました。

続きをするかどうかは、いまのところ不明です。